

巻 頭 言

整形外科の sub-specialty としての「外傷整形外科」の確立

北海道整形外科外傷研究会 副代表 土 田 芳 彦

この度、第27巻「北海道整形外科外傷研究会誌」の巻頭言を「北海道整形外科外傷研究会副代表」として書かせていただきます。主題は「整形外科の subspecialty としての外傷整形外科の確立」です。

外傷整形外科といえは多くは骨折治療が対象ですが、その中には粉碎しているもの、他部位損傷を伴うもの、皮膚・軟部組織損傷を伴うものなどの困難な症例も多く存在します。しかも、どれ一つとして同じものはなく、その治療の奥深さは言うまでもありません。

ですから「整形外科外傷は若手整形外科医のテリトリーだ」などと片付けるわけにはいかないのです。日本以外の先進国（欧米）において、「外傷整形外科」は一つの独立した科として成り立っていますのは当然のことです。

自分の研修医時代を思い起こしますと、骨折の患者さんがやってくると「テキスト」を広げ、似たような写真を探し出し、そこで行われている治療を真似してみるといった具合でした。まさに料理本医療（cooking book surgery）だったわけですが、今でも多くの若き整形外科医はこの「cooking book surgery」を行っています。系統だった学習の機会は少ないのです。

日本の医学教育においては、「大学の医局」が大きな役割を果たしてきました。脊椎外科、膝関節外科、手の外科などなど、レベルの高い医療の提供と次世代の育成は、常に医局を中心しての教育がなされてきました。「医局」が専門医を育成してきたのです。

しかし残念ながら、「骨折」、「外傷」の分野において、系統だった教育を行っている大学医局はほとんどありません。多くの医師は、私が辿った道のように「見よう見まね」でやっているのが現実です。

我々は「大学医局」機能を補完する役割を持つ機構を持たなければなりません。色々な組織が考えられますが、「北海道整形外科外傷研究会」もその一つではないかと考えています。この研究会を中心にすえ、大学の垣根を超え、北海道で働く整形外科医を対象として、良い意味で一つの医局のように「教育としてのカンファレンスの場」を作り、さらに色々な研修会を開催し、また研修情報を提供する。そのようなことが出来たら素晴らしいと夢見ています。